

## 幼 児 と 体 育



岡 本 卓 夫

吾々が幼稚園や保育所へ行って子供達の自然の遊びを観察する時、それはちっとの休む間もなく、逃げる、追つかける、登る、飛び下りる、跳ぶ、投げる等々、あんなにもよく動けるものだと感じて了う程活動している。然しこれこそ彼等本来の姿であり彼等の生活なのである。そこから彼等は自分の欲求を満足させているのである。然もそれ等の欲求を満たしているのは彼等の身体であり身体活動なのである。吾々はこれ等子供の身体活動を通しての遊びの生活

の姿を見逃してはいないであろうか。子供の自然の姿から取材した保育内容と云う事を今一度考えてみる必要があるのではないか。

私は絶えず幼稚園や小学校の子供達の自然の遊びや正課の授業を観る機会をもって、いるが自由時の遊びに於てはその能力の差こそ多少あれ、走りたい、跳びたい、投げたいと云う欲求の面では何らの相違も見受けられないのである。

然しこれが一度学習となると、その内容に於て驚く程の相違が見受けられるのである。幼稚園では何かしら幼児を特別な存在の様に、さも大事な子供だと云う様に、かくまっけて了っている様な気がする。走り出すようにする馬の手綱を「グイ」とひき締めていると云った感じがする。彼等本来の活動し様とする欲求を満たしているのはリズム遊びくらいのもので他は、折紙、粘土細工、絵を画く、と云つた様な殆んど静的な内容ばかりである。然るに彼等が一度小学校に入学するや、其処では堂々と体育がカリキュラムに組入れられて居り、然も彼等

は喜々として走り、跳び、投げ伸々として成長している。私はここに、幼稚園教育と小学校教育に大きなギャップがある様に思われるのである。これは何に原因しているのであろうか、私は実際に幼稚園教育の経験もなく従つて現状も充分知らないで、ともすれば否定なさる先生方が居られるかも知れないが、私は第三者的な立場で私なりのこれ等の原因を考えてみることにする。

先づ第一に、幼稚園は学校教育法で学校と認められて居り乍ら、学校と云う性格よりは寧ろ子供に怪我をさせない様大切に預っている場所であると云う考え方、従つて第二に、走ったり跳んだり、登ったりして若し怪我でもさせば大変なことになる。一君子危きに近よらず」と云う旧来の習慣をそのまま受け継いでいること。第三に、以上の事から自然に内容も、折紙、粘土細工等静的なものが多く、其処から知力、推理力、創造力、判断力を伸ばそうとしている。私はこれ等の方法が総てではないと思う。第四に幼児の体育に関する研究が未だ不十分であり、それ故にどんな題材を、どの様な

方法で、どの程度取入れていったのが良いかに就いて明らかにされていないこと。第五に幼稚園の教師は殆んど女子であり、「女が体育なんて」と云う旧来の考え方から教師自身に体育的関心が薄いこと。第六に幼稚園教員養成コースに於て体育の地位が充分認められていないこと。等が大きな原因をなしていると思うのである。私は素人乍らも、幼稚園教育は未だ充分な姿でないと言いたい。ここに大きな穴がある様に思われる。

教育の場に於て一つには「子供の要求を考え乍ら云々」と云うことが強調されている今日、かの園児達の自然の遊びから取材したもの、即ち身体活動を主とした内容が生かされていないことである。怪我をさせたら大変だ、と云う臆病な考えを起す前に、これ等身体活動を通ず場に於て、如何に多くの教育的な場が存在するかを考えてみる必要があるのではないだろうか。体育が教育の重要な分野を占める様になった今日の理由もここにあるのである。幼稚園が学校として認められているにも拘らず、体育的

なものが充分取入れられていないと云う事は何かしら一沫の淋しさを感ずる。一人私のみだろうか―教師と子供が赤裸々な姿で接触すると云う体育の場から、教師は実に多くの指導のヒントを得るに相違ない。そして教育の場が如何に多くあるかを発見するであろう。然も子供達は体育によって他の分野では獲得出来ないところの判断力、推理力、創造力、忍耐力を獲得するであろうし又他方健康の増進、好ましい習慣やより良い民主的生活態度の育成もなされると思ふのである。

この様に考えてみる時、吾々は子供達の遊びを単なる遊びとして又、施設、遊具を公園のそれと同じ様に単なる施設遊具として、漠然と眺めていると云う訳にはゆかないであろう。教師は其処から取材した内容に如何に多くの教育的な場が存在するかの認識を新たにすると同時に、現在の手綱を最大可能範囲にまでゆるめ、もっと積極的に体育をカリキュラムに取入れてゆく可きではなからうか。

私は斯様な見解を以って、その第一段階

として多くの先生方の貴重な時間と労力の御援助により、廿九年度一ヶ年を費し、都市、農村、漁村の園児男女一九七名と、これと比較するため大体三地域の条件を備えていると思われる小学校の一年生男女四二名の基本的運動能力たる、走、立巾跳、片脚跳、ボール投げ、懸垂について毎月実施した結果を比較検討してみると、園児の能力と小学校一年生との能力の差は、吾々が日頃想像している程の差はなく、それ等の一ヶ年の発達の型も殆んど同じで、少くとも運動能力に於ては、園児は特別な存在ではなく、小学校一年生と連続的過程であると云うことがほぼ明らかになったのである。

この事からでも幼稚園の体育は、小学校の一年生より少し低次なものなれば可能であると云う事が理解され相に思ふのである。然し唯これだけの資料で結論づけて了うのは危険な事で、今後多くの調査と研究を必要とする問題であるが、何れにせよ、この時代の子供の教育に体育の重要性を強調したいのである。

(徳島大学学芸学部体育研究室)